

では、**マタイの福音書 13 章 44～46 節**を今朝のテキストといたしました。ですから、そこを先ず一度通して冒頭に読ませて頂きます。『⁴⁴天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。⁴⁵また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。⁴⁶すばらしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。』ここで止めておきます。その前後も是非ゆっくりとお家に帰ってお読み頂きたいと思いますが、まずこのテキストの一つ一つの言葉を皆さんに分かち合う前に、今神様の事を考えて頂きたいと思います。誰でも知っている有名な作曲家のベートーベンは、1816年の日記にこのように記しております。『**神は形を持ちたまわない。私たちは神を見ることは出来ない。しかし神の成したまえる御業により、神は永遠で、全知、全能、遍在なるお方であることを知ることが出来る**』と。ベートーベンが日記にこのように書き記しております。神は永遠で、全知（何でも知っている）、そして全能（何でも出来る）、そして遍在なるお方（遍在というのはどこにでもおられるお方という意味です。）その神を、神の成したまえる御業によって知ることが出来るとあります。その神の成したまえる御業というのは、この神は全宇宙を造られた創造者でありますから、その創造したもの、それを被造物と呼ぶわけです。Creation(クリエーション)と英語でいますが、それを通して私たちはこの神をある程度知ることが出来ます。ベートーベンと同じ時代に生きたナポレオンという人は、エジプトに出征した時のある夜、船の上で幕僚たちが神が存在するか否か論じ合っているその議論に耳を傾けました。その時にナポレオンは、無神論を唱える者の声を聞いて、彼は宝石を散りばめた輝く天の星を指して「諸君、何とでも議論出来ようが、しかしこれらすべてを造ったのは一体誰であろうか。」という質問をしたそうです。もし神を取り除いてしまうならば、この天の星々も取り除かねばなるまい、ということを書いたかったです。で、さらに同じ時代に生きた天文学者でもあり、音楽家でもあり、望遠鏡の製作者としても有名です。しかも天王星を発見した人でも知られているんですが、フレデリック・ウィリアム・ハーシェルという人がおります。ベートーベン、ナポレオンと同じ時代の人ですが、この人はこう言っています。「**人類のあらゆる発見は聖書に収められている真理をいよいよ強く証拠だてるものである**」と。それからだいたい150年経過した時に、1人の科学者が月から戻ってきました。1971年私の生まれた年ですが、アメリカの宇宙船アポロ15号で月面に下りた工学博士のジェーム・アーウィン大佐はこう言いました。「**アポロ15号で月へ行ってきたおかげで、今までよりいっそう明確に神の臨在を感じる事ができた**」と、宇宙の印象をインタビューで語っております。地球というのは人類が全て乗り込む宇宙船と言われております。毎年太陽の周りをコマのようにぐるぐる回りながら、23時間56分4秒の速度で1回転しながら回っております。この地球の軌道というのは、太陽に対して23.5度傾いています。この傾きが太陽の光の変化によって、いわゆる春夏秋冬というものを作り出しております。地球が太陽の周りを1周するのには約365日と4分の1かかります。この4分の1の中途半端な数というのがいわゆる閏年に計算されていくわけですが、この地球の動きというのはさらに複雑で自分自身で回る自転と、そして太陽の周りを回る公転、それに加えながら太陽と一緒に、太陽がある銀河系もまたぐるぐる回っているんです。それは秒速20キロというスピードなんですが、さらにこの銀河系自体が自転しながらその軌道の中で糸乱れず極めて正確で狂いが無い秩序だったその動きがどのような力によって動いているのか、原動力もそうですし、またどのような計算による軌道でこれが正確に運行されているのか。その調和と一貫性、それは天文学者をしても理解に苦しむ、これがただのビッグバンと言う偶然の爆発で、そしてそれが偶然秩序立った配置となって、そして秩序立った軌

道を持って、それぞれが自転や公転、複雑な動きを繰り返しながら、それで調和が保たれている。完全さ、矛盾のない自由、全体に広がる美しさが保たれている。その優雅なデザインが、一体どのような形で、それが本当に偶然に出来たのか、悩まされるわけです。NASAの科学者の90%は神を信じる者だと言われてます。大半はクリスチャンだと言われてはいますが、科学を突き詰めれば突き詰めるほどやはり神存在に行き会うわけです。「単なる偶然の産物とは思えない。やっぱり創造者がいるのではないか。」という存在にぶつかって、その存在を認めざるを得なくなるわけです。また地球は毎日1回転するという事は、先ほど自転するという話をしましたけれども、赤道は4万キロあります。地球は1周4万キロあるわけです。それが24時間で1周すると、時速1,600キロ以上になります。もの凄いスピードでクルクル回っているわけです。そんな上に私たちが乗っかっているわけです。時速1,600キロ以上のスピードのこの地球、そのコマの上に私たちは乗っかっているわけですが、通常普通皆さんは頭で考えれば分かると思うんですが、人間はどうして吹っ飛ばされずにまるで止まっているかのような。地面は動いていないように思うわけです。地震でもあれば分かりますけども、ただ本来は時速1,600キロのもの凄いスピードでコマが回っているわけです。なぜ人は吹き飛ばされないのか。もちろん重力があるからでしょうと言うかもしれませんが。もちろんこの重力は確かに存在しますが、ただ最新の科学をもってしても重力を解明するには至っておりません。「重力とは一体何ですか」と、科学者に聞いても、物理学者に聞いてもまだそれが解明されておりません。ただそこにあるのは分かっています。万有引力の法則を発見したニュートンも聖書を信じるクリスチャンでありました。

で、他にも私たちがどうして時速1,600キロのもの凄いスピードでぐるぐる回るこのコマのような地球の上で吹っ飛ばされないでいられるのか。それは空気層というものにも秘密があります。宇宙空間には空気がありませんので、ものすごいスピードで移動しても摩擦が起きません。ロケットが地球を離脱する時に空気による摩擦が起きますから毎秒11キロの速度で、これは時速3万9,600キロというもの凄いスピードで上昇する必要があります。大気圏に突入して、そして宇宙空間に飛び出すためには時速3万9,600キロというもの凄いスピードがなければ宇宙に飛び出すことは出来ません。それよりも遅い速度で移動しても地球から離れることは出来ないんです。つまり私たちを取り巻くこの地球の空気層によって私たちもまた宇宙圏外に飛び出さないで済んでいるということです。仮に皆さんがもし時速3万9,600キロ以上で移動することが、走ることが出来れば、もちろん皆さんは宇宙の外に飛び出して行くことは出来ます。飛び出して行ってしまいうわけですが、それが出来ませんので私たちは守られていると言って良いと思います。また、そこから疑問として「どうして空気層自体が吹き飛ばされないのか。」それは、地球がそれに相応しい速度で回転しているからです。これも計算し尽くされたものであります。ちょうどそれは飛行機の中で立ったり座ったりすることが出来る同じ様な感覚であります。惑星地球号というものの中に私たちは今乗っていると言って良いと思います。そのようにしてまた私たちは神の造られたものを目にする時に、これが偶然ではありえないと。こんなに美しく、こんなに秩序だって、この環境が保たれているのは、これは誰かが保持しているから、誰かがデザインされたから、誰かが造られたからだという事は容易に分かるかと思えます。オゾン層がなければ地球上の生命は細菌1個ですら生存出来ません。ですから私たちは皆生かされていると言って良いと思います。「私は、俺は自分の力で生きてるんだ。」と言う人がいますけども、実際には生かされているのが事実であります。肉体ひとつとっても同じことです。心臓も、肝臓も、腎臓も、肺も、全て私たちが寝てる間にも一生懸命動いて働いてくれております。1日に10万回動くという心臓が、一回でも自分の力で動かすという事はありません。75兆個の細胞で人1人は出来上がっているわけですが、この途方もない数字の細胞が、自律神経系、内分泌系、また免疫系などの働きを体全体で調和しながら動いているわけです。まあ、それも信じ難いといつもない奇跡と言って良いと思います。不思議な力、統制された力によって私たちは無意識的にも生かされているわけです。そのように生かされ

ているという謙^{へりくだ}った思いで神を探求するならば、必ず求める者には神は出会って下さいます。当たり前なものなど1つありません。まあ、ある人は「それはすべて自然の恵みです。」と言うかもしれませんが、実際には自然を造られたのは神様です。ですからすべては神の恵みであります。「お天道様のおかげですと。」そのお天道様を作ったのは神様です。ですから、このように神の造られたものを一つ一つつぶさに観察していけば、必ず「神など信じない。」と豪語する人でも、謙りをもって認めざるを得なくなります。それは科学の時代が進めば進むほどです。科学と宗教は矛盾すると思っている人がいますけれども、実際には科学を極めれば極めるほど神がおられるということに必ずぶつかって行きますので、これは偶然ではとても説明しきれないという事実^{じじつ}に必ず出会うわけです。もっと突き詰めて言うと、私たちはそれぞれ DNA を持っております。各 DNA は百科事典 1 億ページ分の情報が詰まっております。1 人分の DNA を集めてそれをひとまとめにするとちょうど大きさとしては皆さんの冷凍庫中に入っている氷のキューブ 1 個ぐらいにまとまるわけです。人間の、皆さんの持っているすべての DNA をかき集めるとちょうど氷のキューブ 1 個分に収まります。でもそれらを全部つなげて延ばしますと、この地球から太陽まで 400 往復する長さになってしまうんです。信じ難い驚くべきことであります。それだけの情報が私たちの体内に収められているんです。まあ、それも到底理解出来ないわけですけども、生命は決して偶然には生まれません。最近忙しくて、なかなか庭に出て伸びてしまった草を刈ったり、また植物の手入れをすることが最近出来ていなかったんですけども、ついこないだ出てみたら、いきなりクモの巣に襲われました。庭中クモの巣だらけでびっくりしました。でも、よくよく見ると非常に美しいクモの巣です。で、素朴な疑問があります。皆さんも多分想像したり考えたことがあると思いますが、どうして蜘蛛は自分の巣に引っかからないのかと。まあ、クモの巣というのは真ん中付近と縦糸の部分、縦と横に糸が綺麗に張られていますけれども、その中央の付近と縦糸の付近には実は粘液球というネバネバした液体があるんですけども、よく細かく見ると何か水滴のようなものがクモの巣に着いているのに気付かれると思います。それは水滴ではなくて、まあ水滴が付く場合もありますけれども、ただそれは粘液というベトベトしたちょうどハエトリのようなまたゴキブリホイホイのようなノリのようなものです。それが玉のようにして横糸のところにそれが付けられております。ですから蜘蛛はその横糸に張られている粘液の付いているところは避けて、縦糸とそして中央あたりにいつもいて自分がそれに絡^{から}まらないようにしているわけですけども。ただ、万が一その粘液に足が引っかかってしまっても蜘蛛の足には実は油が付いております。オイルが付いておりますので、実際にこの粘液球の粘りに影響されることもないんです。ですから自由に実際には歩くことが出来ます。その蜘蛛の足から油を全部きれいに取ってしまったら、蜘蛛でもやっぱり自分の巣にかかってしまいます。まあ、そういう調べを既に皆さんもよく知っているファーブルという人が実験して、そのことを証明して確認しております。『ファーブルの昆虫記』皆さんも読んだことがあるかと思いますが。まあ、そのファーブルは実は進化論に対して非常に強い反対意見を持っておりました。『ファーブルの昆虫記』は名前は知っているけども実際に読んだことがない人が結構多いと思います。でもそのファーブルの書いた昆虫記の中で、再三再四進化論はデタラメだということをファーブルは述べております。で、ファーブルは実は進化論を説いたチャールズ・ダーウィンとも親交がありました。友達でもあったんですが、でも進化論は真っ向から否定しました。まあ批判をして、実際にチャールズ・ダーウィンも友達でしたのでファーブルのことを類い稀なる観察家と高い評価をしていたんですが、それでも友達でも「言ってることが間違っている。進化論はおかしい。」ということをはっきりと公言して、それを昆虫記の中にも書いてあります。そのファーブルの行なった進化論批判の 1 つに“狩り蜂”のたとえがあります。その昆虫記の中に「進化論へのお灸」と題した章があります。岩波文庫から出ているんですが、その中でファーブルは進化論を「現実から解離させた概念のお遊びである。」と非難をして、具体的な提起としてその“狩り蜂”の中で特に“穴蜂”というものを実際の例として挙げております。ファーブルの知っている何種類かの蜂、それに近い種類の

蜂をいくつか形態等も明らかにしながら、それぞれこおろぎを食べる、ハンターとしてこおろぎを狩る蜂もあれば、また同じ種類の蜂では“キリギリスもどき”というものを狩る蜂もあれば、また別の種はカマキリ類を特に狩る蜂の種類があると。全部同じ近い種類の蜂なんですが、ハントするものが、自分たちが実際に摂取する、食べる、そのターゲットとなる虫というのは、それぞれ異なるということを見ました。もし、進化論が正しければ全部先祖は同じだということになります。その先祖は一体何を狩っていたのか。子孫はこおろぎを狩ったり、キリギリスもどきを狩ったり、またカマキリ類を狩ったりしてそれぞれ種別に食べるものを変えているわけですが、先祖はじゃあ何を狩っていたのか。その事をフェールは聞いたわけです。で、もし先祖の中から特定の獲物を狩る者が出たとすれば、先祖はそれら全部を獲得の選択肢にしていたことになります。もともとの先祖はこおろぎも、キリギリスもどきも、またカマキリ類も全部その原種は全て狩って食べていたということに当然なるわけですが、でもそれをもし真実だと進化論を認めたとしますと、たくさんの食べ物を獲物を取れる中から限られたものしか取らない、食べないものが出てくるのは如何なものかと。本当にそれが進化と言えるだろうか。何でも取って食べられる方がいいわけです。でも、特定のものしか食べることが出来ない、狩ることが出来ない、そういう蜂が出てくるのは、むしろ進化どころか退化じゃないですか。そういうことを提起したわけです。狩り蜂はその種類によって特定のイモムシなどの昆虫を捕まえて、幼虫の餌にするために針で刺して、麻酔をして獲ってくるものもあります。で、決まった種類のイモムシを、決まった場所で探して、そして見つけたら決まった方法で攻撃をして、決まった場所を針で刺さなければいけないんですが、そういった形態、そういった行動は誰にも教えられることなく生まれながらに身に付けているわけです。そのような形態、そのような習性、それはもう既に組み込まれたものとして、もうどの行動が1つ欠けてもイモムシを取ることが出来ないんですが、もうそれが誰から教えられることもなく、もう生まれながら身につけて、大人になったらそれを皆同じように行なうわけです。まあ、進化する途中の狩り蜂、それはありえないんじゃないかと。特定のイモムシを見つけて、特定の場所で捕まえて、特定の場所に針を刺して、そして幼虫に餌を持ってくる。それが進化の過程で身に着けたとするならば、それはおかしいんじゃないかと。まあそういった疑問を打ち出して進化論への鋭い批判を行ったわけです。まあこういった例を皆さん言われるまでもなく、やっぱり私はどう見ても全てこの世界が偶然に出来たとは思えません。やっぱりこれは何か意図を持って私たちよりも遥かに知的な存在がすべてを造られたんだと、デザインされたんだという事は多くの人ももちろん聖書を信じていない人たちもそのあたりまでは認めることが出来ようかと思えます。神様は確かにおられて、そしてそのデザインは完璧で素晴らしいと。そして私たちはその神の恵みによって生かされている。素晴らしいじゃないかと。でも、その一方でまた考えさせられることがあります。そんなに神様が完璧に世界を造られて、そんなに神様が私たちをこよなく愛して、恵みの中で生かして下さっているならば、どうしてこの世界に悲劇が起こるのか、不幸が起こるのか、戦争やテロや貧困や飢餓、病気、そして犯罪、レイプされたり、幼児が虐待されたり、どうしてそんな不正が、不条理が、悲劇が許されるのか。それは信じられない。神様が愛ならばどうしてそんなことが許されるのか。理解出来ない。神の創造の神秘性も理解出来ないですが、でもそのような世界で起きている様々な悲劇、不幸、不条理、それについても理解出来ない。だから神など信じないんだという人も大勢おられます。そうした疑問は皆さんも多分抱いたことがあるかと思えますし、そしてそうした疑問をぶつけられて答えるのに困ってしまった人もいるかもしれません。今の疑問の答えというのは実は聖書の中の最初の書、すべての起源を記している『創世記』にその答えを見い出すことが出来ます。答えに行き詰まったら是非、**創世記**に戻って、**創世記**というのは文字通り書名は『起源の書』という意味ですから、すべての起源に、初心に戻る、そこに答えが見出されます。で、その**創世記**を見て頂くと、神様は世界を6日間で造られましたが、それらはすべて完璧でありました。全て造ったものを見ては神様は満足されました。もちろんそこには、戦争も、貧困も、

病気も、犯罪も、いわゆる不正、不条理、悲劇などは1つも見受けられませんでした。全部が完璧だったんです。ところがその完璧な世界において、完璧な人、罪がない人を造って、それをアダムとエバと呼びますけれども、その2人が神様が食べてはならないとする善悪の知識の木の実、いわゆる禁断の木の実を彼らが神に背いて食べてしまって、それから今日見られるような様々な災害、様々な事件、事故、病気、呪い、不幸、悲劇が始まったわけです。ですからそれまでは神様が造られた世界はあまりにも素晴らしく完璧で、何の欠けも不足もなかったわけですが、しかし神が造られた人が神に背いてから、今日見られるような様々な悪がはびこるようになりました。ですから神様が最初から災害をもたらすためにこの世界を造ったのではありません。神様が最初から人間を病気にして、最後は死ぬ運命に、そして生きている間も様々な苦しみに合うようにすべてデザインされたわけではありません。実際にアダムには地球を支配する支配権も与えられていました。**創世記**を読んで頂くと分かります。アダムは神様から地球の支配権、統治権、そして地球をある意味で所有するようにして、地球の土地の権利書なるものまでも神様から頂いていたわけです。でも、そのような素晴らしい特権を、恵みをアダムは罪を犯したことで神の敵であるサタンにそれを売り渡してしまいました。皆さんもよく知っているようにそのサタンが蛇の形をとって先ずは妻のエバに近づいて、そして「神様が本当にこの善悪の知識の木の実を食べてはならないと言ったんですか。」と。そのように誘惑をして、そしてその誘惑はまた妻から夫へと、アダムへと及んで、そしてアダムはそれはサタンの誘惑だということも分かっている、それでも食べたくて意図的に神様に逆らったわけです。善悪の知識の木の実を食べてしまったその瞬間に、人は自分の中で善と悪を判断するようになりました。それまでは神様がすべての判断基準でしたが、それ以降は自分が神のようにになりたいという想いから、自分が善と悪を判断する。自分にとっての善、自分にとっての悪。それは人それぞれ基準が違ふと思います。そこから秩序が乱れたわけです。もうバラバラです。私にとっての善は、あなたにとっては善ではないかもしれません。私にとっての悪は、あなたにとっては悪ではないかもしれません。まあ、そのようなことから当然秩序が乱れて、やりたい放題。まあ、それを法律等で縛るわけですけども、もちろんそれらも世界でばらつきがあるわけです。なぜこんなことが許されるのか、まかり通るのか。なぜこんな理解出来ないことが、なぜこのような不条理が、不正が、許されるのか。疑問を抱き、それに悩み、苦しみ、命を断ってしまう者たちもおります。全ての悪の起源はそこにあるわけです。**創世記**の中に、最初の人、アダムとエバが神に背いて、そして結果エデンの園を追放されてしまった。その事件に事の発端は見出すことが出来ます。まあ、その結果アダムとエバはただエデンの園を追放されただけではなくて、神様から委託された、任されたその地球の支配、統治権、また地球の所有とされるその土地の権利書なるものまでもサタンに渡してしまったわけです。ですからサタンがアダムに代わって、この世界を、地球を治める者になりました。このことはイエスキリストもお認めになっています。イエス・キリストが40日40夜断食をしたその時にサタンが近づいて来て誘惑を仕掛けました。その時にサタンはこの世の栄光栄華を見せて「もし、あなたが私をひれ伏して拝むならば、これらをすべてあなたへ差し上げよう。」と誘惑をしました。で、それに対してイエスは「何を言っているんだ。これは私のものだ。お前のものじゃない。」とは言いませんでした。まあ、それはつまりサタンがこの世界を手に行っているということをイエスもまた認めていたということです。で、そのような誘惑に対してイエスは聖書の言葉を持って撃退をして誘惑を退けたわけですが、その後もまたイエス・キリストはある時に嵐に遭いました。その時は弟子たちも一緒にガラヤ湖の上でまさに死の危険に直面していたわけですが、イエスは1人船の中では居眠りしていました。まあ、弟子たちはもう死にかけたので、イエスを起こして「あなたは何ともお思いにならないのですかと。もう私たちはこんな目に遭って、もうこれで死にそうなんですよと。」そこでイエスは起き上がってその嵐に向かって「静まれ。」と。「黙れ。静まれ。」ということで、これは特に福音書の中では悪霊を叱るときにイエスが使う言葉です。つまりイエスは悪霊を叱るように嵐を叱ったんです。何が言いたいかとい

うと、その嵐の背後には悪霊が働いていたということです。自然災害の背後には悪霊が働くということがあるということも覚えて欲しいと思います。ですから、神様がそのような災害をいつも起こしていると多くの人は思っています。だから天災という言葉が古くから使われております。でも最近はどうもそのような概念は覆がえされました。自然災害は天災ではないんだと。実はそれは天災ではなくて人災であると。地球環境の破壊、バランスが崩されたことから様々な災害が引き起こされてきた。その原因を突き詰めていくと、人間の環境破壊がその多くの発端となっているんだということが科学的にも証明されてきました。ですから天災というのは不適切でむしろ人災の方が正しいということが言われるようになりました。自己中心的にただお金儲けのために自然をどんどん破壊して生態系を崩して、そして貧しい国のことなど考えずに欲望に駆られた人たちが引き起こしてきた結果が、ツケが、今回ってきているという見方が大勢を占めております。ですから、人災ということからしてもそれは人の自己中心な思い、聖書で言うところの罪から来ているわけです。そして自分の好きなように、思い通りにやる。自分を神のように見なして、そしてやりたい放題やること。それはまさに**創世記**の冒頭に出てくる罪人の姿であり、罪のもたらした結果であります。それがすべての起源であります。戦争やテロや災害や病気や、そして貧困、飢餓、犯罪、ありとあらゆる不正、不条理、悲劇、不幸、それらは全て神のせいではなくて私たち人間のせいであり、そしてこの世を支配するサタン、またその配下の悪霊たちの仕業であるということが言えるかと思えます。でもそのような状態を神様はもちろん放置するお方ではありません。ここで**黙示録の 5 章**をちょっと開いて頂きたいと思えます。ここは天国のシーンです。今天国にまで思いを馳せて欲しいと思えます。天国へトリップしたいと思えますが、『**1**また、私は、御座にすわっておられる方の右の手に巻き物があるのを見た。それは内側にも外側にも文字が書きしるされ、七つの封印で封じられていた。**2**また私は、ひとりの強い御使いが、大声でふれ広めて、「巻き物を開いて、封印を解くのにふさわしい者はだれか。」と言っているのを見た。**3**しかし、天にも、地にも、地の下にも、だれひとりその巻き物を開くことのできる者はなく、見ることのできる者もいなかった。**4**巻き物を開くにも、見るのにも、ふさわしい者がだれも見つからなかったので、私は（私はというのはヨハネの黙示録を書いたヨハネです。使徒ヨハネです。）激しく泣いていた。**5**すると、長老のひとりが、私に言った。「泣いてはいけない。見なさい。ユダ族から出たしし、ダビデの根が勝利を得たので、その巻き物を開いて、七つの封印を解くことができます。』結論から言うと“ユダ族から出たしし、ダビデの根”というのはイエス・キリストのことです。まあ、ここで巻き物が封印で、7つの封印で閉じられているというのは、これは実は土地の権利書なるものです。権利証書です。**エレミヤの 32 章**をメモしておいて後で開いて読んでほしいと思えます。そこには土地の権利書に関する記述があります。ユダヤ人の歴史において土地の権利書というのは巻き物になっていて内側と外側にそれぞれ字を書きます。で、7つの封印をするケースも確かにあります。もし、土地の所有者が借金などで土地の権利証書を手放すことになった場合、巻き物の外側にその借金の額、土地を失った理由を書いて、どのような代価で、どのような方法でそれを買い戻すことが出来るかという条項、条件というものもすべて外側に書かれておりました。で、それら最終的に7つの封印によってしっかりと閉じられたわけです。まあ、これは土地を簡単に失わないためのユダヤの律法なんですけれども、7年以内に借金を返済すれば土地は7つの封印を解かれて、手放したその土地は元のオーナーのもとに買い戻されます。ただ、ヨベルの年というものがあるって50年経てば無条件でやむなく手放してしまった土地も、そしてその借金も何もかもローンから何もかもがすべて棒引きになる、帳消しになるという法律もあるんですけども、でも50年待たなくても7年以内に実際に買い戻すことも出来ますし、7年目にももちろん法律があって買い戻すことが出来ます。で、この今**黙示録**で読んだ**5 章**の巻き物というのは実は地球の土地の権利証書です。それは最初アダムに渡されたものです。アダムは地球を支配していました。**創世記 1 章 28 節**に書かれています。ところがさっきもお話したように、サタンが蛇の形をしてやってきて、人間は神の祝福の命令ではなくて、悪魔の囁

きに、誘惑の言葉に従ってしまいました。そして食べてはならないとする禁断の木の実は手に入れたんですが、その代わりに地球の土地の権利証書をサタンに委譲してしまったわけです。譲渡してしまったわけです。その結果、土地の支配権が、地球の支配権が、アダムからサタン、悪魔に移ってしまいました。この世界は悪魔のものとなったという話もしました。イエス・キリストはヨハネの福音書で3回もサタンのことを「この世を支配する者」と呼んでおります。またパウロもサタンのことを“この世の神”と呼んでおります。第二コリントの4章4節に書いてあります。また、第一ヨハネの5:19にこう書いてあります。第一ヨハネ、これは黙示録を書いたとする、また福音書を書いたとするヨハネと同じですが、第一ヨハネ5:19『私たちは神からの者であり、世全体は悪い者の支配下にあることを知っています。』と。“世全体は”、世界全体は、地球全体は、悪い者の支配下にあることを知っています、とあります。これはもちろん悪い者とはサタンのことです。元々は神がすべてを造られて、神様がすべての所有者であったんですが、その所有者である神様が最初の人アダムにその所有権というものを、地球の土地の権利証書なるものを委託していたわけです。管理させていたわけです。まあ、その理由、目的と言うのは、委託された者が、管理を命じられた者が、その創造者の神の御業を行って、神の栄光のためにこの造られた世界が実に調和のとれた完全なものとして、このつくられた世界が神の素晴らしさを証しするものとして、平和も、そして病もない戦争もないこの完璧な世界で祝福を受けるためでもあったわけです。ところが人間は神に反逆して創造者である神様から自らを引き離してしまいました。結果、神との関係も壊れ、無くし、そして神の造られたもの、被造物、すなわち自然界とのバランスも崩れてしまいました。神との関係が悪くなれば、すべての関係が悪くなります。もし、あなたが人間関係で悩んでいるならば、その理由は、その原因は、相手じゃありません。またあなたじゃありません。それはあなたと神との関係に先ずは問題があります。それが全て狂わせているわけです。自然界との関係、これも同じであります。神との関係が正されれば必ず自然界との調和も取れるようになります。で、実際にそれはいつの日か実現される日がやってくると聖書は約束しております。いずれにしても人間自身が神の造られた完全で調和のとれた世界を、無情で、不条理な、悲惨な世界に作り変えてしまったと。だから、すべての災害が人災であると、最近ではクリスチャンでない人たちも、神を信じない者たちも、そのように口を揃えて言うようになりました。ですから不運な事故、天災、病気、それを神のせいにして、神を呪う者たちもいます。でも元々はすべて人間と、厳密には人間の罪と、そして悪魔のせいだということが正確な結論であります。まあ、ゆだねられた支配権が悪魔のものとなってしまいましたのでそれが全て狂わせているわけですが、それを神様は放置しないということを少しお話しましたが、そのために実はイエス・キリストが遣わされました。一旦サタンの手に渡ってしまったものをもう一度取り戻すために、もう一度買い戻すために、その地球の権利証書の外側に書かれているすべての条項を、条件を満たして、そうすれば買い取ることが出来ますので、そのためにイエス・キリストは来られました。まあ、最初は今読んだところに、黙示録の5章の所でしたけども、この世界には誰もこの巻き物の封印を解く相応しい者はいないんだと、ヨハネは号泣しました。だれも一旦サタンの手に渡ってしまったものを買い戻すことが出来ない、つまりこの戦争も、このテロも、この災害も、この病気も、ありとあらゆる不条理、不幸、悲劇、これはいつまでも続くのかと。これは終わる日が来ないんだと。なんて辛い、なんて悲しい、生きていても虚しいだけだと。もう泣くしかありません。これはヨハネだけじゃないと思います。それを知らなければもう泣くしかありません。生きていても辛いだけです。幸せはつかの間です。死んだら全てが終わりです。健康な人も突然病気になるかもしれません。元気だった人も急に死んでしまうとしれませんし、今日の帰りに急に事故にあって、若い人でも命を落とすかもしれません。なぜこんなことが、なぜ愛する人がこんな辛い目に。そういうことを私たちは思えば思うほど、もう泣くしかないわけですが、でも黙示録の中に書かれていたように、1人だけ相応しい者がおられると。その方こそ私たちの信じる主イエス・キリストであります。その方だけがかつてアダム

がサタンに譲渡してしまったその地球の権利証書、いわゆる地球の支配権というものを取り戻すことが出来る。売り渡したものを再び^{あがな}贖って買い戻すことが出来ると。罪の結果失なわれたものは命でした。食べてはならないという善悪の知識の木の実を食べれば必ず死ぬと。実際にアダムとエバは死にました。肉体的にはすぐ死にませんでした。神との関係は断絶され、肉体においても死ぬべきものとなりました。ですから、罪がもたらしたものは死でありました。聖書の中にも「罪から来る報酬は死です。」と書いてあります。ローマ 6 : 23 の言葉です。罪から来る報酬は死ですから、それが地球の権利書の外側に書かれていたわけです。それを買い戻すためには当然命をもって、命の代価をもって、買い取らなければなりません。人の命は地球よりも重いと言われますけれども、実際にお金をいくら出しても命を買い戻すことは出来ません。命には命をもって。それが鉄則でありました。それが求められた要求でありましたので、イエス・キリストは自らの命をもって。しかもそれはアダムの命と同等でなければいけません。アダムというのは、もともと罪がなかった者ですから、罪の無い者の命でなければ意味がありません。罪があればその者は自分の罪の故に死ぬわけですから、身代わりになることは出来ません。そんな存在はいないと、ヨハネは嘆いたわけですが、でも 1 人だけおられるということで、それがイエス・キリストでありました。まあ、そのようにして私たちはアダムの犯した罪の結果、さまざまな不幸の中で生きなければならなかったわけですが、イエス・キリストは聖書では最後のアダムとしてこの地球にやってきて、そして文字通り地球の土地の権利証書を買戻すために十字架にかかってご自分の命を代価として差し出して下さったことで私たちは買い取られたわけです。そして私たちはもういつまでも泣く者ではなくなったわけです。サタンの支配下にはもう地球はありません。ただ、まだ自分のものであると勝手に主張して横領しようとしているだけで、その爪痕のようなものが現在起こっている様々な不幸であります。犯罪であったり、災害であったりするわけですが、でもそれもまたもう一度イエス・キリストが戻って来られる日にすべて刷新されて、全部回復されます。

まあ、いずれにしても話を戻していきたいと思います。今日のテキストはどこだったかもう忘れてしまったと思いますが、マタイの福音書 13 章の方に戻って頂きたいと思います。44 節をもう一度開いて頂きたいと思います。『天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠しておいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います。』この“畑に隠された宝”、これは“天の御国”と言われていますが、これは天国のことではありません。これは、“天の御国”と言われているのは“教会”のことであるわけですが、まあここで“教会”というのは、もちろんイエス・キリストによって贖われた者、買い取られた者を指すわけですが、実際にここで物を買うということが書いてありますが、ここでは畑を買うというたとえが使われています。当時イエスの時代は財産を銀行に預けたり、どこか家の隠し金庫に隠すというのではなくて、だいたい土の中に、地面の中に隠して、そして保管したという習慣がありました。ですから、ここで畑の中に隠された宝というのは、実は元々その畑のオーナーが自分の宝を、財産を隠していたんですけれども、それが何年も何十年も経って忘れ去られていて、たまたまそこに残されていたということです。そのもの凄なお宝が埋まっているその畑を、畑自体はそれほど価値がなくても、その中にある宝が価値があるということで、どうしてもその宝を得るためには畑全体を買い取らなければなりません。で、その畑を買うために全財産を費やしたとしてもその宝がさらに上回る価値のあるものなので、是非とも何としてでも手に入れたいということで、その宝を手に入れるためには全財産持ち物全部を売り払ってでも買い取りたいということがここに言われています。で、もちろんこれはたとえなんですけども、ここでたとえられている”畑を買い求めていく人”、これはイエス・キリストを指しています。で、”畑”は何を指すかというとなら世界を指しています。全世界です。このことは 38 節でイエスによって説明されています。『畑はこの世界のことです』とあります。他のたとえ話との関連でも使われていますので、明らかに“畑”とはこの世界です。では“宝”は何か。それは実はあなたです。私です。イ

イエス・キリストは全世界の中に私たちを宝と見て、どうしても私たちを買い取りたい。そのためには全世界をまず買わなければいけない。贖わなければならないということで、イエス・キリストは持ち物全部を文字通り売り払いました。天を出てイエス・キリストはすべての栄光・栄華を投げ打ってでも、私たちを買い取るために実に十字架の死にまで従ってご自分の罪のない命を、尊い血潮を流して、私たちを買い取って下さいました。まあ、このたとえはよく誤解されて教えられています。これは人が救いを得るためには、何もかも売り払って、ありとあらゆる犠牲を払って、努力をして、自分の救いを熱心に求めるべきだ。努力して救いを獲得すべきだという教えが教会でなされていますが、それは全くの誤解です。結構そういう教えがありますので注意して下さい。イエスははっきりと「**畑とは全世界を指している**」と言っております。

で、その中でもう一つ覚えて頂きたい事は、あなたはこのイエス・キリストによって、買い戻される愛されている者だということ、イエスの目にはあなたは宝のような存在だということも、覚えて欲しいと思います。ローマ 5:8 にイエス・キリストの愛についても、神の愛についても書かれているところであります。『**しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。**』神が私たちのことをどれほど愛しているか。それは私たちを死ぬほど愛しているというその十字架の死が、その神の愛の確かさを、偉大さを表しているということなんです。ポイントは『**まだ罪人であったとき**』に、イエス・キリストを知らないで自分の罪の中に生きていた時、まあ罪人の時というのはまさにあなたの人生に置いて最悪の時、思い出して下さい。あの時自分は最低の人間だった。最低の最悪のことをしていた。その時を思い出して下さい。その時もイエスはあなたを愛していました。教会に通っている時、聖書を読んでいる時、祈っている時、人に親切にしている時ではありません。あなたが最悪だった時、イエス・キリストはあなたのために十字架にかかって死んで下さるほどあなたを愛しておられます。まあ、そのことを覚えてイエスキリストが最初のアダムによって私たちが売り渡されてしまったんですが、最後のアダムとなってイエスは私たちを買い戻して下さいました。最初のアダムは禁断の木の実を食べて、そして人類を、私たちを、サタンの手に、敵の手に渡しましたけども、最後のアダムは、イエス・キリストは私たちを贖うために禁断の木ではなくて、十字架という木にかかって、そこで私たちを敵の手から、サタンの手から買い戻して下さいました。最初の人アダムは罪の結果呪いをこの世界にもたらしてしまいました。でも最後のアダムであるイエス・キリストは自らが呪いそのものとなりました。ガラテヤの 3 章にも書いてあるように、「**木にかけられる者はすべて呪われたものである。**」と。イエス・キリストがその呪いとなられたということがガラテヤ 3:13 に書かれています。(『**キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである。」と書いてあるからです。**』) で、罪の結果最初のアダムはいばらアザミをもたらしたわけですが、最後のアダムであるイエス・キリストは文字通りいばらを自らの額に食い込ませるように、自らがいばらとなって下さったわけ。2 コリント 5:21 にも皆さんよく知っている言葉だと思います。神は、罪を知らない方を、罪の無い方、イエス・キリストを、私たちのために罪とされて、そして私たちがイエス・キリストにあって、神の義とされるために、呪いをイエスは受け、そして私たちがその結果呪いから解放されて、そして神の義とされるように。すべてイエス・キリストが天を去って、持ち物を全部売り払ってでも私たち宝を獲得したいがためにして下さいました御業であります。それが究極に十字架の死において表されました。すべての罪の代価、あなたが過去に犯した罪、今現在でも犯しているその罪、これからも犯してしまうであろう罪のすべての代価を、罪の精算をイエス・キリストがして下さいました。なぜそこまで思うかもしれません。1 つ分かっていることはイエスキリストが天の真の聖所において、ご自身の血を携えて、父なる神の御前で「私こそがこの巻物を解くのに相応しい者です。」と宣言するためでありました。世界を買い取るの

はお金では出来ません。命をもってのみです。その命は罪のない命でなければなりません。まあ、その話を先ほどしました。そして私たちはそれほどまでに愛され、イエスの目には宝に映っているわけです。信じられないと思うかもしれませんが、「私のようなものがお宝なんて。」お宝鑑定団。多くの人にとってただのガラクタ、ただのクズ、と思える物が、ある特定の人たちにとってみればそれはもうお宝だと。何億出したっていいと。こんな汚い土くれがと。こんな汚い掛軸がと、思うかもしれませんが、でも見る人によっては、欲しい人にとってはそれは価値のあるものです。ですから、是非自分自身を見たら「私はただのチリです。私はただのクズです。何の価値也没有ありません。」と自分を見て嘆く人もいます。また同じ罪を犯してしまいました。また堂々巡りの人生。なんて情けない、不甲斐ないと。自分のような者には価値がない。生きていても仕方がない。クリスチャンとして相応しくない。教会に来る資格もないんだと思うかもしれませんが、でもイエスの目にあなたは高価で尊いものです。

でも、同時に敵も黙っていません。耳元で囁きます。「やっぱりお前はクズだよと。クリスチャンとは思えないねと。折角救われたのにまたイエス・キリストを十字架につけるような恐ろしい醜い罪を犯して、それでも救われていると言うのか。それでも平気な顔して教会にまた来れるのか。どの面下げて。」とサタンは耳元で囁きます。

まあ、そうした私たちに対してイエスは次の節で、もう一度テキストに戻って頂きたいと思います。マタイの福音書 13 : 45 『⁴⁵また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。⁴⁶すばらしい値うちの真珠を一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます。』と。畑に隠された宝という話から、今度は良い真珠を探している商人のたとえにイエスは話を移しております。当時商人は王様から遣わされました。献上された宝石はすべて王の胸元に飾られて、王の栄光・権威を表すものとなりました。で、ここで言われている“商人”というのはその前のたとえからの流れで言えば、イエス・キリストであります。で、“真珠”というのはもちろん宝の私たちであります。で、その“商人を遣わす王”はもちろん父なる神でありますけれども、イエスは持ち物全部、文字通り自分の命までも犠牲にして私たちを買い取って下さいました。先ほど私たちは自分のことを見ても、とても価値ある者とは思えないと、サタンもそう言う、で結構当たっていると。だから私はやっぱり価値が無いんだと。チリに過ぎないクズなんだと、思うかもしれませんが、でも真珠のことを思って欲しいと思います。それも神様によって造られた素晴らしい被造物ですけども、まあ真珠貝と言われるもの、まあ、あこや貝が多いわけですけども、そのあこや貝の軟体、柔らかい貝の肉の部分に異物が入るわけです。それは砂粒であったり、寄生虫 parasite のようなものでもそうなんですけども、もちろんそのような異物が入れば痛みが伴うわけです。傷つくわけです。その中でトラブルが起こるわけです。フラストレーションが起こるわけです。異物が入ってくると。でもそれをあこや貝は外套膜の付近でその刺激を感じてすぐにその軟体細胞から真珠質の分泌物を出してその異物を包み込んでいきます。で、それを何度も何度もコーティングしながら次第に形成されて大体平均 7 年間ぐらいかかるんですが、そこで皆さんのよく知る美しい真珠というものがつくられていくわけです。もともとは真珠貝の中に入ってくる異物です。砂です、寄生虫です。私たちはまさにそのような異物です。砂粒です。寄生虫 parasite です。でもそのようなものが真珠貝の中に入ると美しくコーティングされて、元あった姿が想像もつかないようなものに変えられるんです。もうお分かりかと思いますが、私たちは確かに神の目には異物でしかありません。私たちの罪がイエス・キリストを十字架に磔はりつけにして、あんなにおぞましい姿にしたんです。でも、イエスキリストは私たちをご自身の義によって、神の義によって覆って下さいました。それが義の衣となって私たちを美しく着飾って、まるで真珠のように輝くものとして下さったわけです。だから私たちには価値があるわけです。全てを投げ打ってでもこれが欲しいと。

で、面白いことに真珠を唯一傷ませるものがあります。真珠のネックレスを持っている人たち、イミテ

ーションではありません。本物のネックレスを持っている人たちは分かると思うんですが、それをもし身に着けていると、手入れしなければ真珠は傷んでいきます。何が真珠を傷ませるかというそれは人の汗です。人の汗が真珠の美しさを傷ませるわけです。失わせるわけです。何が言いたいかというと、人の汗、すなわち人の努力です。人の行いです。それが神の美しさを台無しにしてしまうものです。人の汗、人の努力、人の犠牲。それは自分が価値ある者だとして努力する汗です。私が頑張ればこのように認めてもらえる。出来る人間だ。有能な人間だ。人から褒められるために、人から拍手を受けるために、賞賛を受けてスポットライトを浴びるために、私たちは頑張ります。汗を流して、なんとか認めてもらおう、人にも神にも、教会にも、牧師にも認めてもらおうと、その流す汗が実は真珠を傷ませてしまうわけです。自分が如何に価値ある者か、それを証明しようとする汗、努力、犠牲は主の美しさを、せっかく着飾って美しくされているその輝きを奪ってしまうものだとすることを覚えて下さい。

まあ、今日はこれで終わりたいと思うんですけども、是非皆さんに最後考えて頂きたい事は、もしこの中に、もしかしたらこのメッセージを CD なりインターネットで聞く者の中に、「私はまだイエス・キリストに買い取られた者ではありません。私はまだ宝ではない、真珠ではありません。本当に文字通りのクズです。汚れた罪人です。そして私はただただ泣くしかありません。何のために生きているかも分からず、自分の価値も見出せず、そして一生懸命自分の価値を証明しようとして頑張っているけれども、でも空しいだけです。」そういう人がいるならば、イエスはあなたのことを愛しています。まだ罪人だった時、あなたが最悪の時から、イエスはあなたを愛しています。「どうしたらいいですか。」単純に聖書は信じなさい。

「救われるためにはどうしたらいいですか。」買い取ってもらうためには、宝にして頂くためには、真珠にして頂くためには、ただ今お話ししたことを、イエス・キリストのことを、イエスの御業をすべて信じるだけであなたは救われ、あなたはイエスの宝となります。真珠となります。是非、この単純なことです。自分で頑張っただけ汗を流して、救われるに値する者、神に愛される者として、汗を流しているうちはいつまでも分かりませんし、いつまでもそれは偽りの美しさの中でしか生きられません。あなたが自分を美しくしているのは、それは偽りの美です。イミテーションです。偽物の真珠です。ただのプラスチックです。でも本物の美しさを手に入れたければ、是非イエスに身を任せて、自分が異物であることを、ただの砂粒であることを。ただの寄生虫 parasite、ただ生きていても仕方がない、人の害にしかならない。そんなあなたが、イエスを信じるならばイエスがあなたを愛で覆って下さいます。その義で覆って下さいます。平安で包み込んで下さいます。喜びで満たして下さい。そしてあなたは気が付いたら、真珠のように美しく輝いたものになります。で、この真珠というのは、実はユダヤ人にとっては価値のないものです。ユダヤ人の食物規定の中には、貝というものは汚れた食べ物としてそれは手をつけられないものです。ですから、これは真珠というのは、実は異邦人にとっては価値のあるものとして、実はこれは異邦人である、すなわちユダヤ人ではない私たちのことも特別に指しております。イエス・キリストは私たち異邦人を花嫁として迎え入れて下さるお方です。ユダヤ人にとっては真珠は価値のないものですが、異邦人の世界では真珠は大変高価なものとして取引されました。ですから、ここで特に私たちのことが、ユダヤ人でない日本人もアメリカ人も世界中のユダヤ人でない人たちも全部がイエスに愛されている者として、他人事ではありません。そしてこの真珠は、参考までにギリシャの世界では光の子と呼ばれました。光子ですね。この中にも光子さんという人がおられますけれども、知らない方は是非会いに来て下さい。 MGF に来ればお会いできます。真珠のような方ですから。まあ、それは皆さんも同じだということです。皆さんも光の子どもとされる。聖書にあります。私たちもクリスチャンは皆光の子どもとされます。暗闇の子ではありません。光の子どもとされます。美しく輝くことが出来ますが、でもその美しさもその輝きも全て人の汗によって台無しにされてしまうということ。自分の行いによって、律法主義で全部台無ししてしまう。価値のないものになってしまうのは、先ず私たちにやはり原因があるということも覚えて欲しいと思います。是非

一つ一つ自分自身に当てはめて、クリスチャンじゃない人たちもこの話は他人事と思わずにあなたも愛されているということ、そしてクリスチャンの方ももちろん愛されております。その愛をただ素直に受けるだけ、信じるだけ、イエス・キリストが私たちを求めておられます。あなたを救いたいと願っています。素晴らしい救い主がいます。あなたを欲して下さる方がいるんです。あなたと永遠を共にしたい、死んでもあなたを手放さないんです。こんな素晴らしい神は他にはいません。是非信じて欲しいと思います。では、今日はこれで終わりたいと思います。